

## 力と慈しみ深き神、見給う神

「滅ぼさないでください」の曲の 57 編、58 編に続く 3 つ目のもの。あとは、75 編。「サウルがダビデを殺そうと人を遣わして見張らせたとき」に歌った歌とされる。「わたし」という第一人称での詩であり、危機の時、嘆き、苦難の時の歌である。個人の詩ではあるが、信仰共同体を代表している。サムエル記上 19:11 節以下にサウルがダビデの家を見張らせた物語がある。信仰者が敵に追い詰められ、苦難を味わっているのを「ご覧ください」(hinnê 4 節、8 節)そして、5 節にも「ご覧ください」とある。神は信仰者を取り巻く困難を見ていて下さり、信仰者自身を見ておられるお方である。神は、敵から「助け出し」(2 節)、「救ってくださる」(3 節)と懇願し、力の神、(10 節)、「御力」(12 節、17 節)であり、「砦の塔」(10 節、17 節、18 節)「逃れ場」(17 節)である。この力の神は同時に、「慈しみ深い」お方である(11 節)と賛美している。

### 1. 神は見給う神である

新共同訳には「ご覧ください」が 3 回登場するが、4 節、8 節は「見よ」で敵対者の実態をみて欲しいという懇願。5 節の「助けるために目を覚まし、見て下さい」の「レエイ」は、神は抑圧と苦難に直面するハガルに「見給う神」(エル・ロイ)であると明らかにされた(創世記 16:13)ことを思い起させる。苦境を「ご覧になっている方」があり、「苦境の中にある私」を神は見ておられる。

### 2. 神は力である

敵対するものの存在は単なる幻想ではなく、実際に「力ある者」である。(4 節)しかし、これらの力に勝って神は「力あるお方」であり、「力」そのものであり、「わたしの力」である。(10, 12, 17, 18 節)パウロは十字架の神、弱い神を語っているようではあるが、実は「力」(I コリント 1:18、25、2:4、4:20 参照)に触れている。神は信仰者を助け、救い出すことができる方である。

### 3. 砦の塔

神はその力強さを「砦の塔」(エロヒム ミシュガビ)として信仰者を匿い、護るという形で助けてくださる。12 節では「盾」という表現も現れる。攻撃より防御の姿勢である。

### 4. 慈しみ深い神

神は力の神であるばかりか、「エロヘイ ヘセド」、慈しみ深いお方であり、愛をもって救出して下さる。「力のない恩寵は頼りにならず、恩寵のない力は反って恐るべきものである。」(青木澄十郎)

力の神と慈しみ深い神は常にセットで登場していることに注目しよう。

### 5. 敵対者のただ中で

リフレインが神賛美ではなく、「夕べになると彼らは戻ってきて 犬のようにほえ、町を巡ります」が繰り返されている。このような執拗な探索の中で詩人は神に頼るのである。「国々」(異邦の民)が 2 度登場し(6 節、9 節)神と信仰者を笑う人々(傲慢と欺き)を神自身が笑い給う(9 節、参照詩編 2:4)。

繰り返しはまことに「神の砦の塔、神は慈しみ深い」(10 節と 18 節)にも見られる。

12 節では、敵対者を殺すのではなく、動揺させ、流浪の民とさせ、イスラエルの近くにおらせることで、神の力と救い、憐れみ深さを思い出させ、記憶させ、イスラエル=ヤコブを問う存在にさせるとは考えさせられる視点である。